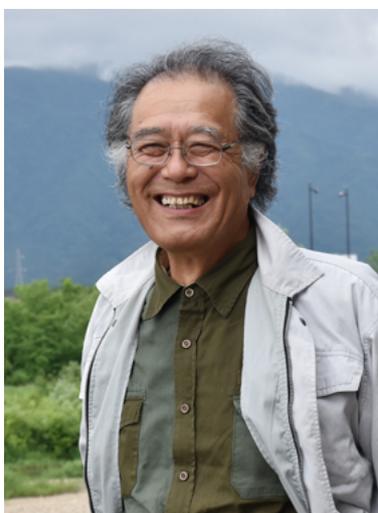


## 提 言

# ～山下惣一の遺志を受け継いで～ ちいさな農業が生きていける 仕組みを



### 菅野芳秀 アジア農民交流センター共同代表

かんの・よしひで／1949年山形県生まれ。畜産と稲作を基本にした循環型農業を営みながら、山形県長井市で生ごみリサイクルのシステム「レインボープラン」を推進するなど、地域づくりを実践。置賜百姓講習会世話人、置賜自給圏推進機構共同代表、大正大学客員教授などを務める。著書に『七転八倒百姓記』（現代書館）、『玉子と土といのち』（創森社）など。

2022年7月、山下惣一さんが亡くなった。家族農業を営みながら、小説、評論、ルポルタージュなど、農と地域の現場から数多くの作品を生み出してきた農民作家だった。山下さんと共に、家族農業の重要性や小農と市民の連携の必要性を説いてきた、同志でもある菅野芳秀さんに故・山下惣一さんのメッセージを寄稿いただいた。

### ■「むずかしいことをやさしく」

「菅野君、あんたは身体の大きな恐竜がなんで早くくたばったか知っているか？ それはな、デカすぎたからだよ。変化する環境に適応できなかったんだな。あんたもデカイ。きっと早死にするよ」

俺は身長190センチ。体重は100キログラム。決して小さくはない。山下さんはこんな俺を相手に、会う度によくからかった。また拙書『玉子と土といのち』について、「やさしいことを、やさしく書いてある本だな」と、電話の向こうから笑いながら辛口の書評(?)をくれた。「いや、いや、山下さん、あれは『自然養鶏』に馴染みのない読者に対して、分かりやすくとの出版社の依頼に応じて

書いたものですから……」

アタフタと弁解する俺。もちろん山下さんの「やさしいことを……」の言葉は、今は亡き作家・井上ひさしさんの、「むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかく、ふかいことをおもしろく……」を前提にした言葉で、俺にとってはかなりの打撃、強烈な一撃だった。もっとも数日後、「よく読み返してみたら、むずかしいことをやさしく書いてあったよ」との言葉が付いてきたが……。



やました・そういち／1936年佐賀県生まれ。農業に従事するかたわら、数多くの小説や評論などを発表してきた。1981年『減反神社』が直木賞候補作となる。2021年「老農は死なず消えゆくのみ」と断筆を宣言。

右／2022年逝去の後に発刊された『山下惣一 百姓の遺言』(家の光協会)。左／農業リーダー向けの雑誌『地上』では1994年から「農のダンディズム考」の連載を始め2021年3月号まで続いた

## ■ 農の現場から生まれたユーモア

山下惣一さんと俺は、「アジア農民交流センター」と、「TPPに反対する人々の運動」の共同代表として、よく顔を合わせては酒席を共にし、談論風発を楽しんできた。もっともほとんどの場合は、山下さんが会話の中心だったが。

山下さんは60冊余の著作を通じて、一貫して農の世界を守ろうとしてきた。決してそれを難しい話、硬い話で語ったり、書いたりはしてこなかった。難しく表現する方がずっとたやすかっただろうが、彼はそこに逃げこんだりはしなかった。なによりも自分自身が現役の百姓として、そこから養った視点と、豊富な事例を駆使して、誰にも分かるように論を組み立てる達人だった。そうだ、そうだと納得し、読み進んでいくうちに、彼が準備していた結論に導かれていく。気持ちのいい読後感が残った。

山下さんは書き手としてだけでなく、話し手としても、大きな力量の持ち主だった。核心を押さえたうえで、それを「こうあるべき」論、「こうでなければならぬ」論として教訓的に話すのではなく、ここでも笑いに包んで提供する。農の現場から作り出された笑い。山下さんの話には現場を踏んだ人間でなければ発想できない、活きた面白さがあった。面白いだけではなく、それを一級の文明批評にまで高め上げる。並々ならぬ力量の持ち主だった。

## ■ 小農の存続が持続可能な社会を築く

その山下さんが亡くなったのは2022年7月のこと。86歳だった。今もって、大きな欠落感の中から抜け出ることができないでいる。

新自由主義市場経済が世界的レベルで小農(家族農業)を苦境に追い込んでいる。日本でも、アジア、ヨーロッパでも、アメリカでもそれは同じだが、コロナで経験したように、その新自由主義経済の限界もまた明らかになってきている。

国連が2019年～2028年を「家族農業の10年」と定め、世界的に家族農業(小農)の役割を評価し、推奨し、守らんとするのも、農業関連巨大企業ではなく、地域と共にある農業、暮らしと共にある農業を地域社会の柱としなければ地域が立ち行かなくなる、社会が不安定になってしまうことを受けてのことである。

小農(家族農業)は世界の農業の中心だ。それを守ることが、いのちの世界を守る核心である。ところが日本では今、政府による農地の規模拡大路線によって、肝心の小農(家族農業)が絶滅寸前のところまで追い込まれている。農家から「農じまい」の声が絶えない。日本でも、大規模化の道ではなく、「ちいさな農業、ちいさな地域、ちいさな生活」がそのままで生きていける仕組みを、市民とともに築いていくことが求められている。

山下さんは百姓として、日本の小農を潰す政治に全力で反対してきた。それは当然のことながら、小農の存続が持続可能な社会を築くうえで不可欠だと確信してきたからだ。今、小農潰しの嵐の中、山下さんの志を受け継ぎ、小農と市民が連携して、日本の農業を守る道がないものか……と模索を続けている。

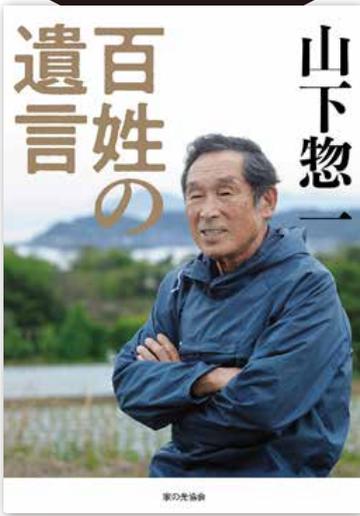
2022年7月に亡くなった  
農民作家・  
山下惣一さん、  
最後のメッセージ

T1293

「農なくして国が成り立つか」

「農の原理は  
循環であって成長ではない」

食の安全保障が脅かされる今こそ伝えたい、大切なこと



定価:2,200円(税込) A5判・並製・336頁

# 山下惣一 百姓の遺言

長引く円安やウクライナ侵攻などによって食糧価格が高騰しています。

日本は、これまでのように

「海外から安く食料を買ってくる」ことが難しくなっています。

「生涯一百姓」を貫き、米の減反政策や農業の規模拡大を進める農業政策に異議を唱え続けた山下惣一さん。

本書は、昨年惜しまれつつ逝去された山下さんの半生を振り返るとともに、日本の農業に関する時代ごとの提言や晩年のエッセイのほか、1981年に直木賞候補作となった『減反神社』も収録。

- 第1章 わたしはこうして百姓になった
- 第2章 むらの暮らし
- 第3章 時代が変われば農業も変わる？
- 第4章 震災と原発、そしてTPP
- 第5章 農家の主より消費者へ
- 第6章 海外から日本の農を考える
- 第7章 ルポ 今と昔の農村
- 第8章 闘病そして長い遺言
- 第9章 野坂昭如さんと井上ひさしさんのこと
- 第10章 〈小説〉減反神社

## 著者紹介 山下惣一(やました・そういち)

1936年佐賀県唐津市生まれ。農業に従事するかたわら創作活動を続ける。1969年『海鳴り』で第13回日本農民文学賞受賞、81年『減反神社』が第85回直木賞候補作となる。著書に『日本人は「食なき国」を望むのか』(家の光協会)、『農の明日へ』(創森社)など多数。アジア農民交流センター、小農学会の顧問も務めた。2021年2月に「老農は死なず消えゆくのみ」と断筆を宣言。2022年7月10日に肺がんのため逝去



## 申 込 欄

〈お申込はお近くのJAへ〉

JA

御中

年 月 日

申 込 書	<b>山下惣一 百姓の遺言</b>		山下惣一・著 ●定価：2,200円(税込) A5判・336頁(54783)	部
	お名前		お電話番号	
	ご住所 〒			

## お支払い方法

口座振替・現金

※いただいた個人情報は本書の注文以外には使用いたしません。  
※ご住所、電話番号についてはご記入いただける範囲で結構です。

JAグループ(一社)家の光協会